

自虐性尺度 (MFS; Masochistic Femininity Scale) の作成

Construction of Masochistic Femininity Scale

仙石 仁美

Hitomi SENGOKU

上智大学大学院文学研究科

Sophia University

問題と目的

DSM-III-Rの草案に、マゾキスト的人格障害 (masochistic personality disorder, 以下MPDとする) という診断名が浮上した。しかし、MPDを定義する性格特徴が、Domestic Violence (以下DVとする¹⁾) の被害を受けた女性が示す特徴とよく合致することから、女性運動家に「DVを被害者の精神障害で説明する試み」と批判され、診断基準にはならなかった (Kutchins, & Kirk, 1997 高木・塚本監訳, 2002)。この事件は、Freudを始めとする彼の後継者らが、マゾキズム的傾向を生物学的な女性特有のものと論じ、新しい世代の精神分析家が、Freudらの生物学的偏向を批判しつつ文化的要因からマゾキズムの要因をとらえようとした論争にも通じる。すなわち、マゾキズムを「生物学的な女性に特有のもの」と論じる人々と、「生物学的な女性全般に特有のもの」と論じるのは極論である」と論じる人々の論争である。そして、それぞれが理論の根拠を科学的に実証しないがために、くりかえされてきた点も通じる。

Horney (1935 泉訳, 1971) は生物学的・文化的両要因からマゾキズム的傾向が女性に多いことを論じた精神分析家の1人である。彼女は、精神分析理論の中で、生物学的な女性に特有といわれてきたマゾキズム的傾向を、Masochistic Femininity (以下MFとする) と概念化し、男女間、文化間でその差を調査することを研究課題に挙げた。調査研究の結果に基づく既存の精神分析理論の再考を研究課題に挙げた臨床家は、私の知る限りHorneyだけである。Horney (1935 泉訳, 1971) の言うMFとは以下の5つの特徴からなる概念である。①要求や攻撃の直接的表現を抑制する傾向。②自分を弱い、無力な、あるいは劣った人間と考え、暗黙のうちにまたは公然と特別の配慮や特権を要求する傾向。③異性への情動的な依存。④自己犠牲性や、服従の傾向、他人に利用され、くいものにされていると感じる傾向、及び異性に責任を負わせたがる傾向。⑤異性をくどき、征服

するのに、自分の弱さや無力さを利用する傾向。

そこで、筆者は彼女の研究課題を継ぎ、本研究でMFの度合いを測る尺度、自虐性尺度 (Masochistic Femininity Scale, 以下MFSとする) を作成し、因子構造、信頼性、妥当性を検討することとした。この尺度は、冒頭に挙げたDV被害者とマゾキズム、女性とマゾキズムをつなぐ精神分析理論の意味を客観的に考える道具となると思われる。

方 法

調査対象者 20~69歳までの男女で、2000年12月1日時点でX区の選挙人名簿に記載されている1100名を、二段階確率比例抽出にてサンプリングした。

項目の作成 まず筆者は、MFの5つの特徴に適合する文章を検討し、全40項目 (各8項目ずつ) を作成した。そして、それらの内容の妥当性を検討するために、心理学専攻の大学院生2名による評価をもとめ、その結果に基づく修正を加えた。教示は、大切な異性 (過去や現在の伴侶や恋人) と一緒にいる自分を想定して答えてもらう形をとった。回答は、“あてはまらない (0点)” から“あてはまる (4点)” までのリカート式5段階尺度で求めた。

手続き 2001年1月、調査依頼の手紙と返信用の封筒を添えた調査用紙を、封書にて対象者の自宅に郵送した。

結果と考察

拒否項目数の多い回答者14名を削除した結果、最終的な有効回答者は250名 (男性108名、女性142名、年齢の範囲20~72歳²⁾ (平均年齢45.8歳, SD13.9)) となり、有効回答率は22.7%であった。

MFSの40項目について、主因子法ヴァリマックス回転によって因子分析した結果、固有値の差を基準として4因子解を採用した。そして、因子負荷量が.45以下の13項目は削除した。

Table 1に因子分析結果を示した。本尺度は、パートナーに対する態度としてのMFの度合いを測るものとした。よって、第1因子は、パートナーとの依存的な関係を維持するために、自分の弱さや無力さを利用して特別な配慮を要求するなど、相手に対する操作的な態度を表すものと考えられ、『操作的 (manipulative) 態度』と命名した。第2因子は、パートナーに対して自分自身の意見を主張できなかったり、主体的に問題解決をはかろうとしない非主張的な態

1) Domestic Violence とは、配偶者や恋人などの「親密な」パートナーから向けられた身体的・精神的・性的暴力をいう。直訳すると「家庭内暴力」だが、児童虐待や老人虐待などをさす用語であるため、ここでは日本語に訳さず、「Domestic Violence」という用語を使っている。

2) 72歳と回答した者が1名いた。

Table 1 MFS の因子分析結果 (n=250)

項目内容	因子 1	因子 2	因子 3	因子 4	共通性
操作的 (manipulative) 態度					
27 自分の弱さをアピールすることで、相手の気持ちを繋ぎとめようとする。	.772	.069	-.004	.155	.619
13 相手を振り向かせるために、自分の弱さを表現する。	.731	.026	.035	-.021	.561
34 誰かに愛されることで、自分の中の空虚感を補おうとする。	.675	-.062	-.018	-.046	.480
6 自分は人より弱いので、相手には特別扱いしてもらいたい。	.622	.009	.067	-.045	.386
22 相手の気持ちが信じられず、たえず相手の気持ちを確認する。	.603	.086	-.130	.125	.422
8 誰かに夢中になることで、自分の漠然とした不安を消そうとする。	.569	-.033	-.023	.096	.363
40 自分が弱くないと、相手の気持ちが離れてしまうように思う。	.567	.096	.024	.130	.419
35 相手の関心が自分に向かっていていることを知っていても、不安になる。	.564	.068	-.065	.091	.389
14 相手に優越感を感じさせることで、自分への気持ちを保とうとする。	.522	-.079	.012	.175	.333
非主張的 (non-assertive) 態度					
38 相手には自分の素直な気持ちを伝えようとする*。	-.005	-.729	.003	-.025	-.488
28 自分が正しくないと思うことは、相手にははっきり言える*。	-.050	-.717	-.057	-.005	-.483
31 自分自身で出来ることを相手に頼りたくない*。	-.045	-.716	.169	-.027	-.496
4 自分の長所を知っている*。	-.008	-.709	.079	-.068	-.479
2 自分自身の目標がはっきりしている*。	-.076	-.629	-.235	-.092	-.514
20 相手との関係に感じている不安は、自分自身で解決しようと思う*。	-.003	-.517	.081	.035	-.286
15 何事も完成までやり通さないと気がすまない*。	.039	-.478	-.222	.015	-.302
服従的 (submissive) 態度					
36 相手に従うよりも、自分が主導権をにぎりたい*。	-.109	-.029	-.665	.077	-.461
30 自分は人より優れていると思う*。	.015	.176	-.626	.143	-.446
26 相手に対して、弱気であるよりも強気であるほうが自分らしい*。	-.023	-.176	-.624	-.001	-.488
1 自分の権利は、相手に主張してひかない*。	.022	.043	-.571	-.149	-.386
9 相手のためでなく、自分自身のために行動していることが多い*。	.115	.003	-.501	-.245	-.401
回避的 (avoidance) 態度					
16 理由があって怒るべきところなのに、ぐっとこらえる。	.109	.219	-.034	.659	.487
3 相手に頼みたい事を、結局言えずに自分でやってしまう。	-.024	-.117	-.045	.656	.359
24 自分の欲求を、相手のために我慢することが多い。	.151	.149	-.001	.615	.423
17 相手に物を頼む時、はっきりと言えずに遠まわしに言う。	.300	.050	-.087	.560	.381
37 自分のためというよりも、相手のために行動していることが多い。	.014	-.048	.073	.500	.249
29 怒りたい事があるのに、それを忘れてしまおうとする。	.253	.239	.176	.454	.393
固有値	5.37	3.88	3.15	2.23	
寄与率 (%)	13.4	9.7	7.9	5.6	

項目文頭の 1~40 の数字は、項目番号を示す。* は逆転項目である。

Table 2 MFS の下位尺度の項目数、平均値、標準偏差、t 値、α 係数、部分全体相関の範囲

	項目数	全体 (n=250)		男性 (n=108)		女性 (n=142)		t 値	α 係数	部分全体相関
		M	SD	M	SD	M	SD			
第 1 因子 操作的 (manipulative) 態度	9	9.34	6.18	9.61	5.71	9.13	6.52	-0.605	0.82	.43~.70
第 2 因子 非主張的 (non-assertive) 態度	7	12.97	6.08	18.00	4.25	9.15	4.15	-16.532****	0.79	.37~.59
第 3 因子 服従的 (submissive) 態度	5	9.78	3.88	8.95	4.11	10.41	3.58	2.984**	0.64	.31~.48
第 4 因子 回避的 (avoidance) 態度	6	11.80	4.49	12.44	4.32	11.32	4.56	-1.980*	0.71	.31~.57

**** p<.0001, ** p<.01, * p<.05.

度を表すものと考えられ、『非主張的 (non-assertive) 態度』と命名した。第3因子は、パートナーとの関係において自分より相手の方が立場が上であると感じたり、服従的であろうとする態度を表すものと考えられ、『服従的 (submissive) 態度』と命名した。第4因子は、非主張的な傾向とも、逆に我慢強い傾向とも受けとれるが、パートナーとの衝突を回避するためにあえて主張しない態度を表すものと考えられ、『回避的 (avoidance) 態度』と命名した。そこで、MFS は、4つの下位尺度、計27項目で構成されるものとした。各下位尺度に含まれる項目の合計得点を、各下位尺度得点とし、得点が高い程MFの度合いが高いことを示すものとした。

本研究で得られたこれらの因子および項目は、Horney (1935 泉訳, 1971) の当初の概念であるMFと合致しないところがあった。即ち、第1因子は5つのMF特徴の②③⑤、第2因子はMF特徴①、第3因子はMF特徴④、第4因子はMF特徴①④の項目で構成されていた。また、第2因子と第3因子は逆項目だけの集まりとなった。②③⑤が固まったのも、①④が固まったのも、①と④のそれぞれ逆項目のみ抽出されたのも、項目作成時の問題点とも考えられる。しかし、MFはHorney (1935 泉訳, 1971) が自身の臨床経験から挙げた特徴なので、それらの臨床像の根底にある特徴を本研究で抽出できたと考えられる。

Table 2に、MFSの下位尺度の項目数、平均値、標準偏差、 t 値、 α 係数、部分全体相関の範囲を示した。妥当性に関しては、内容的妥当性のみを検討であり、十分な検討と言えないことから、問題点が残る。MFは、自虐性の一つの定義であるため、自虐性もしくはそれに通じるものを測定する既存の尺度を用いて、併存的妥当性検討を加えていく必要があると考えられる。しかし、 α 係数は、.64から.82の範囲であり、当面の使用にたえる程度の信頼性が示されたと言えるため、本研究によって、MFSはHorney (1935 泉訳, 1971) の提示したMFという概念を測定する尺度として使用可能であることが示されたと言える。

次に、MFSの下位尺度の男女別の平均値を見ると、女性の方が高い結果となったのは第3因子の服従的態度のみであった。この結果から、これまで生物学的女性と結び付けられてきたマゾキズムの定義は、この第3因子に近いものと考えられる。冒頭にも述べたが、精神分析の分野では、DV被害者の心理的特性としてマゾキズムが挙げられた歴史がある。今後は、DV被害者へのMFSの施行を試み、第3因子の服従的態度の結果をみようと思う。そして、DV被害者とマゾキズム、女性とマゾキズムをつなぐ精神分析理論の意味を検討したい。

また、補足であるが、第2因子の非主張的態度および、第4因子の回避的態度は男性の方が高い結果となり、第2因子は男女に顕著に有意な差を確認した。上記の研究課題とあわせて、男性の非主張的態度および回避的態度を高める外的、内的要素も、今後検討していきたいと思う。

引用文献

- ホーナイ, K. 1971 女性のマゾキズム ケルマン, H. (編) 泉ひさ (訳) 女性の深層心理 黎明書房 Pp. 205-224.
(Horney, K. 1935 The problem of feminine masochism. *The Psychoanalytic Review*, **22**, 241-257. In H. Kelman, (Ed.), 1967 *Feminine psychology*. New York: W.W. Norton.)
カチンス, H.・カーク, S. A. 高木俊介・塚本千秋 (監訳) 2002 精神疾患はつくられる 日本評論社 (Kutchins, H., & Kirk, S. A. 1997 *Making us crazy: DSM-the psychiatric bible and the creation of mental disorders*. New York: Free Press.)

参考文献

- ホーナイ, K. 対馬忠 (監修) 藤沢みほ子・対馬ユキ子 (訳) 1986 自己実現の闘いアカデミア出版会 (Horney, K. 1950 *Neurosis and human growth: The struggle toward self-realization*. New York: Norton)
加茂登志子・氏家由里・大塚佳子 2004 ドメスティック・バイオレンス被害と人格への影響 ト라우マティック・ストレス, **2**, 5-12.
Kass, E, Mackinnon, R., & Spitzer, R. 1986 Masochistic personality: An empirical study. *American Journal of Psychiatry*, **143**, 216-218.
「夫 (恋人) からの暴力」調査研究会 1998 ドメスティック・バイオレンス 有斐閣
仙石仁美 2000 「自虐性 (masochism)」の構造: Freud から新フロイト派への視点の流れ 上智大学臨床心理研究, **23**, 183-194.
仙石仁美 2002 あるドメスティックバイオレンス被害者のロールシャッハ反応: ドメスティックバイオレンス被害者の心理学的特性の検討にむけて 上智大学心理学年報, **26**, 91-99.
仙石仁美・岩佐博人 2001 ドメスティックバイオレンス被害者の心理的特性と女性性 (gender) との関係についての基盤研究: 一般成人女性における自尊感情と性同一性タイプとの関係の検討 メンタルヘルス岡本記念財団 研究助成報告集, **13**, 73-77.